エッセイ

『水戸徳川家ゆかりの地を訪ねる』旅行に参加して、考え思ったこと

植木　静山

五月二十四日午前八時、我々を乗せた観光バスは定刻通りに横浜駅西口を出発した。

茨城水戸方面に行くのだから、当然ベイブリッジを渡り向かうのかと思ったが、さにあらずベイブリッジを車窓から左に見てバスは高速道路を進んでいく。眼下には灰色の長方形をした自動車運搬船が数隻並び、岸壁の広場には色とりどりの輸出用の乗用車が無数に規則正しく並べられている。こんな風景に出会えるのも、新しくできた湾岸道路のお陰ではないだろうか。やがて長いトンネルに入り、羽田国際空港の特徴ある管制塔の脇にまるで潜水艦が浮上するかのようして地上に戻り、バスは渋滞もなく順調に進んでいく。

しばらくすると左側に東京スカイツリーが見えてくるが、バスは常磐道に向かうべく北上し始めたのだろう、今度は方向を変えて江戸川越しにスカイツリーが望める。

今年は明治維新から百五十年目にあたるという。そんな機会に水戸を訪れて、いろいろと私なりにこの国の江戸時代という二百六十年近くの平和な時代を支配した徳川家や水戸徳川家について考えてみたいと思った。水戸には今回は訪れないが、このほかにも水戸徳川家の家宝を管理し展示する徳川美術館や彰考館などがある。

さて、徳川幕府を開いた家康は、なぜ徳川御三家を創設したのだろうか。これから我々が向かう水戸も徳川御三家の一つであった。言うまでもなく家康の血脈と徳川家を永続させるためであったのだろう。

家康には十一人の男子がいたが、その子供達は意外と不運であった。長男の信康は家康が十八歳の時の子供だが、天正七年（一五七九）に織田信長から「武田勝頼に内通した」との疑いをかけられ切腹させられているし、次男の秀康は豊臣秀吉の人質となっている。二代将軍となった三男の秀忠だけが家康の手元で育てられたが、あとは早世したり不運な生涯を送っている。

そのためか徳川家康は、幸か不幸か男として幸せなのか分からないが、晩年も子作りに励まなければならなかった。そして、家康五十九歳の時に、のちに尾張六十一万石の初代藩主となる九男の義直が誕生し、六十一歳の時に紀州五十五万石初代藩主となる十男の頼宣が誕生。続いて、我々が向かおうとしている水戸三十五万石の初代藩主となる十一男頼房が誕生している。家康は老いてもなおも元気だとばかりに、自ら薬研を引いて漢方薬を調合して、七十五歳まで長生きして徳川家の行く末を見定めようとした。

こうして、家康は尾張、紀州、水戸の御三家を定めて、将軍家に何かあれば、すなわち継嗣が絶えるようなことになれば、尾張または紀州家から継嗣を出して血脈が絶えぬようにし、水戸徳川家には、参勤交代を免除して江戸に在府して将軍家を補佐するように定めた。このため水戸徳川家は俗に天下の副将軍と呼ばれた。

また、水戸徳川家の二代藩主となった徳川光圀は、若い頃は多少ぐれており遊び人でもあったが、中国の歴史書「史記」を読み感じるところがあり、学問に励むようになった。そして日本の歴史の編纂に光圀は着手した。内容は日本の全体の歴史ではなく、皇室歴代天皇の事蹟であり、神武天皇から後小松天皇までを扱った歴史書で「大日本史」と呼ばれた。

「大日本史」の影響は大きく、特に幕末には、水戸藩ともども「尊皇攘夷思想」の精神的な支柱になった史書でもあった。勿論、光圀一代などでは完成されず、歴代の水戸藩主が編纂に力を入れて、約二百五十年かけて明治時代になってやっと完成された。

さて、二代将軍となった秀忠であるが、秀忠は十七歳の時にお江与（お江、小督とも）を正室に迎えた。お江与は秀忠より六歳年上だったが、母はお市の方であり、姉である茶々（淀君）はすでにこの時秀吉の子秀頼を生んでいた。この婚儀の世話をしたのは天下人の秀吉であり、婚儀は伏見城で盛大に行なわれた。秀吉はお江与を秀忠に嫁がせ妻とすれば、よもや茶々の息子秀頼を倒すようなことはしないだろうと踏んだのだった。

こんな経緯で結ばれた二人だが、

夫婦仲はきわめてよくて三男五女をもうけた。長男は早死にしたが、次男竹千代（家光）、三男国松（忠長）はすくすくと育った。竹千代は引っ込み思案で無口であり、何かあると乳母のお福（春日局）のうしろに隠れてしまうような子供だったが、これに比べて国松はよく気の利くかわいい子だったので、両親にも気に入られており江戸城中でも、後継者は国松君と噂されるようになっていた。この噂に思いあまった乳母のお福は駿府に行き、大御所家康にこれを訴えた。

大御所家康の裁定は、乱世にあっては長幼の序よりも才覚ある者を継嗣として優先させねばならないが、泰平の世にあっては長幼の序を重んじて無用な争いを起こさぬように、長子相続と定めて祖法とした。

三代将軍となった家光は、母親の紅をさしたり一時男色に溺れたりしたが、春日局の骨折りで側室お楽の方には竹千代（四代将軍家綱）を生ませ、お玉の方には徳松（五代将軍綱吉）を生ませて家康、秀忠の血統を守ることに貢献した。

徳川幕府も成立から百年がたつと、家康、秀忠、家光の血統が絶える危機にみまわれる。と言うのは、七代将軍の家継がわずか八歳で死去してしまったのだ。しかも前年に家継は霊元上皇の皇女八十宮吉子と婚約していたのである。八十宮はこの時二歳であった。幕府も罪なことをしたものである。八十宮は成人後も未婚のままですごし、四十五歳で悲運の生涯を終えたという。

さて八代将軍を誰にするかであるが、決まったのは今日でも「暴れんぼう将軍」などと言われて、テレビに登場する紀州の吉宗であった。吉宗の母親はおゆりの方といわれるが、その出自ははっきりしない。一説には、父は近江浅井の浪人の末裔で医者となりその娘を紀州家家臣の巨勢利清の養女にしたのがおゆりの方だという。また西国巡礼の女が和歌山大立寺の門前で倒れ寺僧に救われ元気となり立ち去る時に娘を残していき、その娘がおゆりの方になったともいう。おゆりは器量もあまりよくない、大女だったというが、世話する人がいて紀州家の下働きとして奉公にあがった。やがて藩主の湯殿係となり、湯殿の雑用をしている時はからずも藩主光貞の手がつき吉宗を生んだ。吉宗は四男だったし母親が卑しかったので家臣の家で育てられたというが、兄達が次々と亡くなり紀州藩主となった。吉宗は母親似で六尺豊かな偉丈夫であり、のちに徳川幕府中興の英主といわれた。

江戸城は表、中奥、大奥からなっているが、表は幕府政庁であり、中奥は官邸であり、大奥は八百人から千人の女性がいる女の園であった。

吉宗が、江戸城に登城してみると奥女中の多いのに驚いたという。そこで吉宗は「奥女中のうち美女だけ五十人を選び出せ」と命じた。女達はもしかしたら側室を選ぶのかと思い、着飾って集まったが、吉宗は一同を見渡して「今日限り、そちたちに暇をつかわす」と宣言して「美女ならば良縁も多かろう」というのが解雇理由だった。吉宗は女達の虚栄心をくすぐって人員整理をしたのであった。吉宗は一日二食、一汁三菜をきびしく守ったというし、衣服も木綿を常用したという。理由は幕府財政を建て直すためであった。

所がこれに異議を唱える大名が現れる。それは御三家筆頭の尾張大納言家の徳川宗春であり、宗春は「将軍家や大名達が倹約に努め金を使わなくなれば、世の中の景気が悪くなる」といい庶民にも金を派手に使うことを奨励した。これが今日でも名古屋では婚礼や祝い事を派手にやる慣習につながっているのかも知れない。

もちろん、吉宗は幕府の政策に反対する宗春を処罰した。と同時に、吉宗は歳月が将軍家と御三家のきずなを弱めてしまった事に気づき改革を行なった。それが「御三卿」の創設だった。吉宗には長男家重、次男宗武、三男宗尹がいたが、家重には九代将軍を継がせることとして、宗武には江戸城田安門内に屋敷をあたえて「田安家」をつくらせ、宗尹には同じく江戸城一橋門内に屋敷をあたえて「一橋家」をつくった。両家とも大名ではなく将軍の身内との扱いで家臣は幕臣を派遣した。もう一つの「清水家」は吉宗の死後つくられたが、御三卿は大名ではないが、将軍に子がないときは将軍職を継ぐ資格を与えた。

子たくさんな将軍として知られる十一代将軍家斉は、十代将軍家治の長男が死去したので一橋家か

ら入り十一代将軍となった。長かった家斉の時世がおわり家斉の子の家慶が十二代将軍となったが、家慶には気がかりなことがあった。それは、次の将軍に予定されている家定が幼少時にかかった疱瘡の高熱のため知恵遅れが目立ち、父である家慶は家定の将来を危ぶんでいたからであった。当時は日本近海に異国船が頻繁に出没するようになり、また大清国がイギリスに大敗するという情報も入ってきていた。

家慶は老中の阿部正弘の推薦もあり、水戸徳川家の九代藩主であった斉昭の子で俊才として知られた七男に一橋家を相続させて、家慶の一字をあたえて慶喜と改名させた。なお、将軍家慶の正室と徳川斉昭の正室はともに有栖川宮家から嫁いできた姉妹であったから、慶喜は家慶の義理の甥であったのだ。

嘉永六年六月（一八五三年）米国のペリー提督が、浦賀に日本の開国と交易の開始を求めて来航しアメリカ大統領親書を渡し十日間滞在しただけで、日本の回答は来年聞きに来ると告げて去って行った。この時将軍家慶は暑気あたりのため伏せっていたが、ペリーが去ると、ペリーショックのためか六十一歳で死去してしまう。

後継者は史上最低といわれた家定が十三代将軍になったが、阿部正弘を中心とした幕府官僚機構がしっかりしており、ペリーとは通商は拒否して「和親条約」を結び開国し、続いて来航したロシアのプチャーチンとは、北方四島を日本のものと認めさせ同様に和親条約を結ぶなどの成果を上げた。しかし残念ながら、激務のためか阿部正弘が三十九歳で死去してしまう。翌年には阿部を頼りとしていた将軍家定も、三十五歳で阿部を追うようにこの世を去った。

次の将軍には、有力な外様大名始め多くの人々が一橋慶喜の将軍就任を望んだが、大老となった井伊直弼は、紀州から十二歳になる慶福を十四代将軍徳川家茂として迎い入れて権力を掌握した。そして、慶喜の父である徳川斉昭には江戸城への登城を禁じて蟄居を命じたし、ペリーに続いて来航したハリスとの間では、朝廷の裁可を得ずに「日米通商条約」を結んでしまった。また自らの政策に反対する者達には、のちに「安政の大獄」と呼ばれた苛烈な政治姿勢でのぞんだ。その結果、大老となってわずか二年で万延元年（一八六〇）三月三日の上巳の節句の日に、桜田門外で水戸脱藩浪士らにより殺害された。

幕府の権威は失墜し、京阪の地では公然と「尊皇倒幕」が叫ばれ、その急進勢力である長州を撃つべく二十歳になった十四代将軍家茂は大阪城にいたが、ここで病死してしまった。

最後の切り札として一橋慶喜が十五代将軍に就任したが、残された仕事は幕府を再建することよりも、如何に幕府の幕引きを計るかしか残されていなかったのだ。慶喜は大政奉還を申し出たが却下されて、慶応三年（一八六八）十二月九日には王政復古の大号令が発せられて将軍職が廃止され、鳥羽伏見の戦いが始まり薩長軍側に錦の御旗が掲げられると、大阪城にいた慶喜は、蒸気船開陽丸で江戸に逃げ帰り上野の寛永寺にて蟄居謹慎してしまった。

この時の慶喜の行動を一部幕臣達は「将軍として何たる態度か」と言って非難したが、慶喜は、歴代の水戸藩主達が編纂に力を入れてきた「大日本史」の精神である、皇室を尊ぶ勤王の心に忠実に従ったのだった。

今回訪れた水戸徳川家の藩校であった「弘道館」に一枚の古い写真が展示されていた。何か祝い事があったのだろう。写真の中央には華やいだ着物を着た女の子達がおり、背後には水戸徳川家の人々が並んでおり、人々の右端には年老いて顔の皺が目立つ慶喜が、洋服を着て姿勢を正して立っていた。十五代将軍をつとめた慶喜も、親戚筋の集まりでは中央でなく端に立つのがごく自然だったのだろう。

慶喜は、徳川十五代将軍の中で初代の家康をしのぐ最高齢の七十七歳まで長生きして、大正二年に亡くなった。苦渋の選択が間違いではなかったとの信念が、あればこその長生きだったのではないだろうか。